

幼児が表現する楽しさを味わうための援助の在り方

幼児の表現意欲を引き出す援助の工夫を通して(4歳児)

嘉数幼稚園 翠宮城 亜希子

目 次

テーマ設定の理由	1
研究仮説	1
研究構想図	2
研究内容	3
1 幼稚園生活の充実を図るために	3
2 子どもの表現について	5
3 表現することを楽しむために	6
4 幼児の実態把握と分析	7
検証保育	
1 活動計画	10
仮説の検証	
1 保育実践の中から幼児の表現をとらえて	12
2 公開検証保育反省会	19
3 仮説の検証まとめ	20
研究の成果と今後の課題	
1 研究の成果	20
2 今後の課題	20
3 おわりに	20

< 主な参考文献 >

幼児が表現する楽しさを味わうための援助の在り方

幼児の表現意欲を引き出す援助の工夫を通して(4歳児)

宜野湾市立嘉数幼稚園教諭 峯宮城 亜希子

テーマ設定の理由

近年、核家族化、都市化など、社会環境が変化していく中、様々なメディアの発達や大型商業施設の増加、親の学校教育に対する意識の変化など、幼児を取り巻く生活環境は大きく変貌している。

これまでかかわってきた幼児を思い返してみると、降園後や休日に家族と大型商業施設に出かけたことや電子ゲームをしたこと、習い事に通っていることや家で読み・書き・計算のお勉強をしたことなどの話も多く聞こえてきた。このように幼児の生活体験が狭小な現状の中、幼稚園生活においては、幼児が人やものなど周囲の様々な環境と直接かかわって心を動かすなど多様な体験を得られるようにしていく必要があると考える。

また、幼稚園教育要領では、「幼児が様々な人やものとのかかわりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、心が動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること。」(第3章第1指導計画の作成に当たっての留意事項1一般的な留意事項(4))とあり、体験の「多様性」と「関連性」が重要視されている。幼児は生活の中で、環境から刺激を受けて心を動かし、興味をもったりかかわったりする(多様な体験)。そして、そこで感じたことや考えたことなどを、その幼児なりに直接的で素朴な形で表現していく。このことから領域「表現」においても、日常的な園生活における体験の中で、幼児が何に興味や関心をもっているかを読み取って保育を進め、幼児が表現する楽しさを味わえるようにすることが園生活の充実にもつながっていくと考える。

本園の4歳児は、クラスの約6割が家庭保育からの入園で集団生活の経験がない。また、入園前の家庭状況や環境の違いにより生活経験に個人差がある。入園当初は、親から離れることに不安を感じている様子が多く見られたが、次第に「これからどんなことが始まるのだろう」と目を輝かせ、園生活に意欲的に取り組む様子も見られるようになってきた。そして、身体の動きや表情、言葉、描画、製作、歌など自分なりの方法で感じたことや考えたことを表したり、教師や友達に伝えたりする幼児もいるが、集団の中で自分の思いや考えを表すことに消極的な幼児もいる。

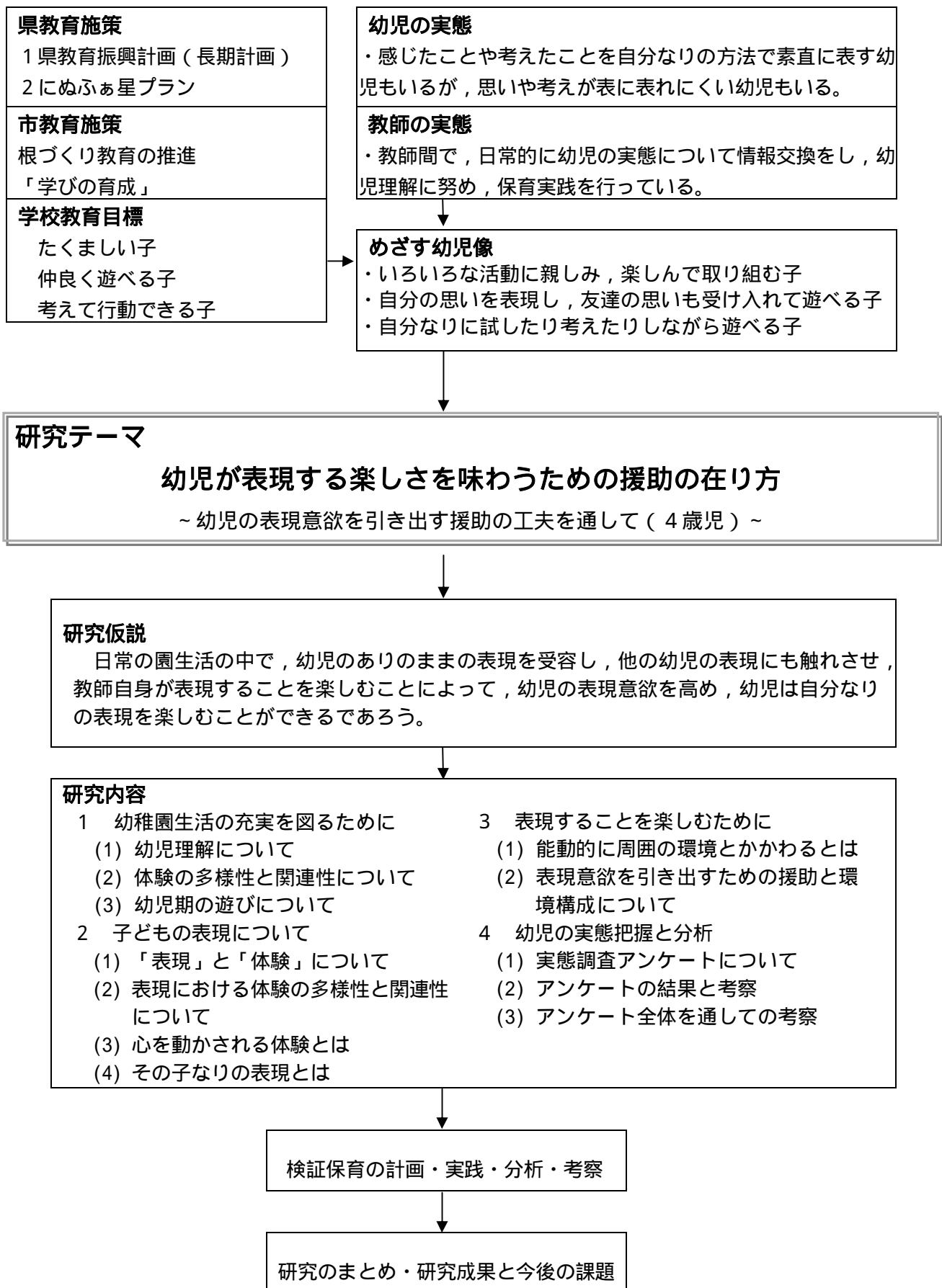
幼児の表現意欲は、自分なりの表現が誰かに受容されることで引き出されていくものであると考える。つまり幼児の表現において、周囲の環境の在り方やその環境とのかかわりを通じた体験の内容が与える影響は大きく、「生活の中に心を動かす体験やそれを伝えたいと思う人間関係が豊かにあること」(『保育用語辞典第5版』)が重要であると言える。幼児は生活の中で、友達や教師、もの、ことなど身近な周囲の環境とかがわりながら、心の中に様々なイメージを思い描いている。そのような一人一人の思いが伝わり、幼児自身が伝わる喜びを味わうことが、表現することへの意欲につながっていくのではないだろうか。したがって教師は、幼児のありのままの姿を受け止め、さらなる表現へと広がるような援助を工夫しなければならないと考える。

そこで本研究では、幼児の表現意欲を引き出し、幼児が表現する楽しさを味わうためにはどのような援助や環境構成が必要なのかについて探っていきたいと考え、本テーマを設定した。

研究仮説

日常の園生活の中で、幼児のありのままの表現を受容し、他の幼児の表現にも触れさせ、教師自身が表現することを楽しむことによって、幼児の表現意欲を高め、幼児は自分なりの表現を楽しむことができるであろう。

研究構想図



研究内容

1 幼稚園生活の充実を図るために

文部科学省は『幼児理解と評価』(平成 22 年)の中で、幼稚園教育においては、教育内容に基づいて計画的に環境をつくり出し、その環境にかかわって幼児が主体性を十分に発揮し展開する生活を通して、望ましい方向に幼児の発達を促すようにすることが重要であるとし、幼稚園教育の充実のための基本的な視点として以下の3点を挙げている。(表1)

表1 幼稚園教育の充実のための基本的な視点

視 点	教師に求められるもの
幼児理解からの 出発	幼児が発達に必要な経験を得るための環境の構成や教師のかかわり方も幼児を理解することによって、はじめて適切なものとなる。だからこそ、教師は幼児と生活を共にしながら、その幼児が今、何に興味をもっているのか、何を実現しようとしているのか、何を感じているのかなどをとらえ続けていかなければならない。
温かい関係を 基盤に (信頼関係を築く)	幼児期の能動性は、周囲の人に自分の存在や行動を認められ、温かく見守られていると感じるときに発揮されるものである。 教師には、幼児の行動や心の動きを温かく受け止め、理解しながら、幼児との間に信頼関係を築くことが求められている。
一人一人の特性に 応じた教育	毎日の保育の中で、それぞれの幼児の生活する姿から、今経験していることは何か、また、今必要な経験は何かをとらえ、それに応じた援助をすることが大切である。 幼稚園では、行動の仕方や考え方などに表れたその子らしさを大切に、一人一人の幼児が、そのよさを発揮しつつ、育っていく過程を重視しなければならない。

以上のことは、幼稚園生活を充実させ、幼児の表現意欲を引き出していく上でも同様におさえておかなくてはならない重要なポイントであると考えられる。このことから『幼児理解と評価』(平成 22 年)を参考に、下記のように考察してみた。

(1) 幼児理解について

幼児を理解するとは、一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止めて指導にあたることと考える。そのためには、幼児と生活を共にしながら、「……らしい」「……ではないか」など、表面に表れた行動から内面を推し量ってみることも、内面に沿っていきこうとする姿勢が大切である。幼児の心の世界に近づいてみようとするすることで、一人一人の幼児の個性や発達の課題も次第に見えてくるということであろう。

さらに、幼稚園生活の中で幼児の行動や心の動きが表現として生み出される背景には、教師のかかわり方が大きな意味をもっているとされる。つまり、教師のかかわり方も振り返りながら、幼児の行動や心の動きを理解しようとするのが、保育を見直すことにもつながっていくということである。

特に表現においては、教師がどのようなかかわりをするかによって、幼児にとって楽しいことにもなり、嫌なことや苦手なことにもなる。幼児の、自分を表現したいという意欲、すなわち内面(心の動き)に教師のかかわりが与える影響は大きい。だからこそ、幼児のありのままの姿を受け止め、幼児を理解すること、すなわち幼児の心の動きに関心をもってかかわることが重要なのである。

ここで、幼児を理解する上で重要な幼児期の発達を柴崎正行の『子どもの発達相談』(1994)と『保育所保育指針』を参考に表2にまとめた。

幼児期とは、1歳ないし1歳半から5、6歳までがこの時期にあたるが、ここでは主に幼稚園教育にかかわる3、4、5歳頃を取り上げることとする。

表2 幼児期の発達の姿

目安	発達課題	発達過程
3歳頃	親から離れても過ごせるという自立心が伸びる。	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉や動きなどで自分の思いやイメージを表現するようになる。 ・友達とのかかわりが多くなるが、実際には同じ場所で同じような遊びをそれぞれが楽しんでいる平行遊びであることが多い。 ・想像の世界を楽しみ、大人の行動や日常生活において経験したことをごっこ遊びに取り入れて遊ぶようになる。 ・自分でできることが多くなり、自立心も高まってくるが、実際にはまだできないことも多く、自立できる面と助けを必要とする面との両面がある。 ・自分はこうしたいと、言葉ではっきり主張するようになる。
4歳頃	友達と過ごしながらか、自己発揮する楽しさを学んでいく。	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に遊ぶこと、友達と同じことをして過ごすことを楽しいと感じるようになるが、自己主張の対立によって友達とのいざこざも多くなっていく。 ・友達と一緒に遊ぶ中で、このようにして遊ぼうと自分の考えを相手に伝えたり、相手からこうしろと命令されてもいやだと拒否したり、さらにはこうすると面白いよとみんなに提案したりできるようになる。 ・想像力が豊かになり、目的を持って行動し、つくったり、かいたり、試したりするようになるが、自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。 ・感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えたり、我慢ができるようになっていく。
5歳頃	集団の中で、自己を調整し思いやる心が育っていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に遊ぶ中で、自分の実力がだんだん理解できるようになり、それに合わせて行動するようになる。 ・遊びの中で友達とかかわることにより、相手の考えや気持ちを次第に理解できるようになっていく。 ・友達とのけんかやトラブルを通して、自己発揮は大事だけれども相手の状態や状況によってその仕方や程度を変えていくことの必要性を学んでいく。(自己発揮と自己抑制) ・言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。 ・自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付けていく。 ・仲間の中の一人としての自覚が生まれる。

(2) 体験の多様性と関連性について

現行の幼稚園教育要領では、子どもの生活や遊びにおいて体験の多様性と関連性が重要視されている。体験とは、人が周囲の様々な環境とかかわることで得られるものである。

また、幼稚園教育要領解説(平成20年)では、「幼稚園生活では、幼児が心身ともに調和のとれた発達をするために、発達の様々な側面にかかわる多様な体験を重ねることが必要であるとされ、その際、特に重要なことは、体験の質であるとし、あることを体験することにより、それが幼児自身の内面の成長につながっていくことこそが大切である」と記されている。

したがって、ここでいう体験の多様性とは、幼児に様々な体験活動を提供すればよいということではなく、ある体験をする中で幼児が多様な学びを得ていくこと、つまり体験の中身が多様であることととらえる。そして、幼児自身の内面の成長につながる体験とは、「幼児が心を動かされる体験」のことであると考えられる。

また、一つ一つの様々な体験が互いに関連し合っている(体験の関連性)ことで、体験に深まりや広がりが生じ、その結果、幼稚園生活が充実したものとなるとも述べられている。

体験の多様性については図1、体験の関連性については図2にそれぞれ表してみた。

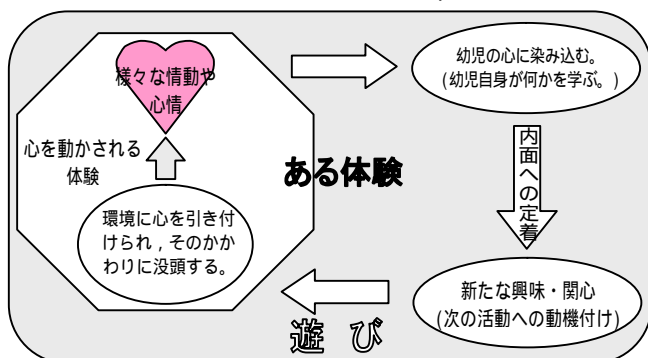


図1 体験の多様性

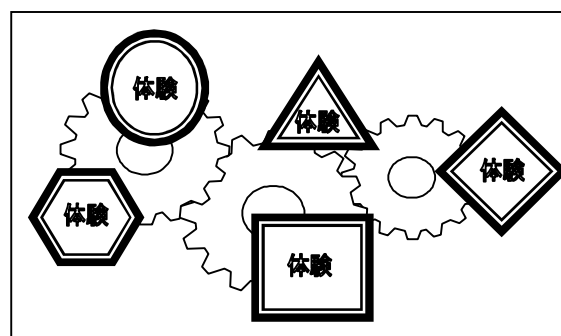


図2 体験の関連性

(3) 幼児期の遊びについて

幼稚園教育要領の総則において、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」と記され「遊び」が重要視されている。したがって、子どもたちが遊びの中でどのようなことを体験しているかをしっかりとらえていく必要がある。

河邊は、『今日から明日へつながる保育』の中で、「遊びの中で体験していることがどのように子どもの成長発達の糧となっていくかは、長い年月の積み重ねの中で顕在化していくものであり、『これをしたらかうなる』という即効性のあるものではない」と述べている。すなわち遊びは、「体験の積み重ね」が重要なのである。そこで、「遊び」について、岡本(2009)と山田(1994)の著書を参考に次の表3にまとめた。

表3 遊びの一般的な性質

	岡本夏木(2009)	山田敏(1994)
1	遊び自体が目的となって営まれる活動であること。	主体にとっては、その楽しい活動自体が目的であって、少なくともその活動が、その外部にある他の目的達成のための単なる手段となっていないこと。
2	「自発性」が強く「解放度」が高いこと。	幼児期の子どもにとっては「極めて自然な活動」であり、遊びの要求は、本能的とも言えるほど「自然な要求」である。
3	比較的「自由度」が高く「可変性」に富むこと。	たとえ客観的・第三者的には一定の制約が存在するような条件化にありながらも、その活動に従事する主体にとっては、そのような制約を感じていないということ。
4	「快適」で「楽しい」感情に彩られて進行すること。	その活動が、その活動の主体にとって楽しいこと。

これらのことから「遊び」は、子どもたちの心の動きから始まる活動であるととらえる。したがって、子どもたちに何かを教える手段ではなく、子どもたちがその活動自体を楽しむことが「遊び」なのである。教師は、幼児がその「遊び」の中から何かを学んでいけるように、しっかりとねらいをもって環境構成や援助の工夫をしていく必要があると考える。

2 子どもの表現について

幼稚園教育要領解説では、「豊かな感性や自己を表現する意欲は、幼児期に自然や人々など身近な環境とかかわる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられる。」と述べられている。幼児は生活の中で、様々な人やものとのかかわりを通して多様な感情体験をし、そこで感じたことや考えたことなどを、その幼児なりに直接的で素朴な形で表現する。そのようなそれぞれの表現を、他者との関係性の中で受容されることで、幼児は自己を表現することの喜びや楽しさを味わうことができる。その体験がさらに表現したいという意欲につながっていくのである。

加藤富美子は、『今日から明日へつながる保育』の中で「子どもの表現を生み出すのは、遊びを中心とした子どもたちの生活であり、その生活を支えている環境であるという点が重要である。」と述べている。そして岡本夏木は、『幼児期』の中で「幼児にあっては遊びそのものが、生き方の表現の姿とも言える」としている。

幼児は、遊びを通して多様な体験をし、何か表したいことがあれば、いつでも自然に自分なりのやり方で感じたことや考えたことを表す。ここに、幼児が表現する喜びを味わうための援助や環境構成のポイントがあるのではないだろうか。

以上のことから、子どもの「表現」とは、歌を歌ったり、絵を描いたり、踊りをおどったりなど、一つ一つの活動だけを指すのではなく、「子どもたちが日常の生活の様々な場面で感じたことや考えたことを自分なりに表すこと、またその表れ(内面から溢れ出たもの)すべて」ととらえる。

(1) 「表現」と「体験」について

河邊貴子は、表現は、「子どもの体験を深化させる。」また、「個人の体験を深めるだけでなく、個々の内なる体験を他者に伝え、共有する働きをする。」と述べている。つまり、ある体験を通して心を動かされたことを、何らかの方法で表現することによって、その体験はその幼児の中に意味のあるものとして刻み込まれ、さらにそれを誰かと共有することによって、その体験がより豊かなものになっていくということである。

そこでまず、子どもたちが体験を通して感じたことや考えたことを表出できるようにするために、子どもの表現をありのまま受け止め、共感していく教師の存在が大切となってくる。

(2) 表現における体験の多様性と関連性について

加藤富美子は「生活の中で様々な人々やものとのかかわりを通して心が動かされる体験をした子どもは、その気持ちを音楽や造形や言葉や身体の動きなどを通して表現する。また、子どもの表現では、心を動かされた体験の“内容”が核となって表現の広がりや深まりが見られ、音楽、造形、言葉、体、演劇的要素などがかかわり合いながら、ときにはこれらの要素が渾然一体となって表現される」と述べている。また加藤は、「心に残る表現の体験は、子どもたちの中で蓄積されていき、ときを経て、この体験を展開した形でのあらたな表現につながっていくことも多い」とし、様々な要素が関連し合いながら広がり深まっていく子どもの表現について図3のように表している。

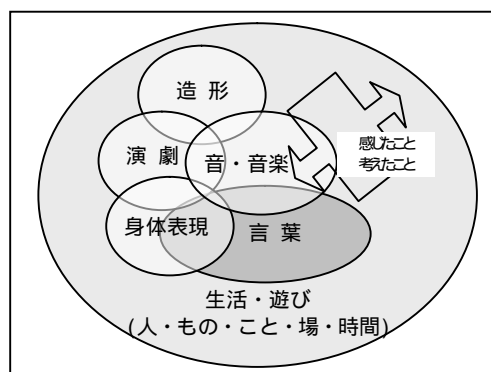


図3 生活・遊びと表現のかかわりと深まり

以上のことから、子どもたちが自分の思いや考えを何らかの形で表出しているということは、何かに表したいという心の動きがあった、つまり、遊びや生活の中でその幼児が心を動かされる体験をしたといえるのではないだろうか。そしてその体験が、過去や未来または現在進行形の様々な表現の体験と結び付いていくことを意識しながら幼児の表現をとらえていかななくてはならないと考える。

(3) 心を動かされる体験とは

幼児は、日常生活の中で周囲の様々な環境から刺激を受け、心を動かす。その刺激は物であったり、人の言葉や行動であったり、動植物であったり、思いがけない出来事であったりする。そして、何かを感じたり、考えたり、うれしさ・楽しさ・悲しみ・怒りなどある種の感情が湧き起こったりする。

このように幼児は、日常生活の小さな出来事や身近にある環境にも心を動かし、興味をもったり、かかわったりしていく。そして、同じ刺激を受けても受け止め方や感じ方は一人一人異なっていると言える。だからこそ、幼児が表現する喜びを味わうためには、教師自身が、幼児一人一人が体験していることや感じていることを読み取り、一人一人の気持ちや表現したいことを受け止めて、幼児を理解し、応答していくことが大切なのである。

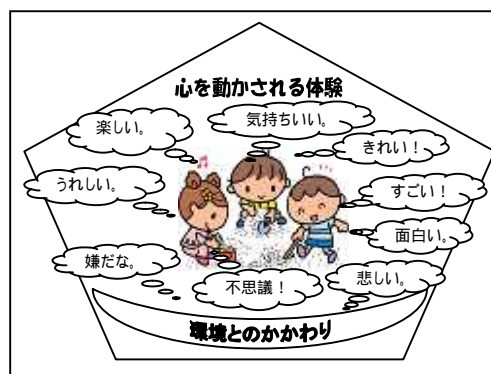


図4 心を動かされる体験

そこで、心を動かされる体験を次のような図で表してみた。(図4)

(4) その子なりの表現とは

その子なりの表現とは、型どおりの、教えられたとおりの表現ではなく、感情が込められた、自分なりの表現、つまりその子の表すありのままの表現であるととらえる。そして自分なりの表現とは、イメージを感じたままに、規制されることなく自由に表すことであると考えられる。

ここで重要なのは、幼児が感じたままを自由に表現することが大切にされる生活と、その子なりの表現を読み取って、理解していこうとする教師の存在(姿勢や態度)ではないだろうか。

3 表現することを楽しむために

人は自分の思いや考えを表現することにより、自分という存在を確かめたり他者との関係を築いたりする。『保育用語辞典第5版』によると、「表現はいわば、人が人らしく生きていくうえで欠かせない能力であり、表現教育とはそうした能力を様々な表現活動や日常生活全般を通して豊かに育てることである」とされる。

特に幼児の場合、「生活の中に心を動かす体験やそれを伝えたいと思う人間関係が豊かにあること、そしてその表しや表れを受け止められることが重要になる」といわれる。つまり、幼児の表現意欲を引き出すためには、幼児が心を動かされる環境や安心して過ごすことができる環境(人的・物的・空間的)を構成していくことが大切であると言える。かかわりたくなる環境があつてこそ幼児の心は動き、誰かに受け止めてもらえる安心感があつてこそ、幼児の中で自己肯定感が育まれて、幼児はのびのびと自分を

表現するようになるのではないだろうか。

そこで、子どもたちがのびのびと自分を表現できるように、そして幼児が能動的に周囲の環境とかがわって自分なりの表現を楽しむことができるようになるために、教師自身が幼児の表現をとらえる視点をしっかりもち、具体的な援助の方法や環境構成の工夫について常に模索する必要があると考える。

(1) 能動的に周囲の環境とかがわるとは

文部科学省は、幼児期の発達を促すために必要なこととして、幼児期の能動性という視点を重視している。(『幼児理解と評価』)そして、それについては以下のことが大切であるとして3つ挙げている(表4)。

表4 能動性を重視する上でおさえておきたいこと

人は周囲の環境に自分から能動的に働きかけようとする力をもっていること 幼児期は能動性を十分に発揮することによって発達に必要な経験を自ら得ていくことが大切な時期であること 能動性は、周囲の人に自分の存在や行動を認められ、温かく見守られていると感じるときに発揮されるものであること

そこで、能動的に周囲の環境とかがわる姿を、「幼児が活発に活動する姿のみを指しているのではなく、黙って友達や教師の動きや遊びを見つめている幼児の姿も、相手の話に聞き入る姿も、その幼児が能動的に周囲の環境とかがわっている姿」(文部科学省『幼児理解と評価』)として受け止めたい。

(2) 表現意欲を引き出すための援助と環境構成について

教師の援助には、言葉かけや表情、動きなど様々な方法がある。そこで、柴崎正行の『新任保育者研修シリーズ』(1994, 1996, 2000)を参考に次の表にまとめてみた。(表5)

表5 援助の方法とポイント

方法	援助・環境構成のポイント	* 幼児の変容
動き	子どもたちと一緒に体を動かして遊ぶ。 言葉だけで保育をするのではなく、行動で示す援助。	* その遊びをすることや、その友達と一緒に遊ぶことへの不安を和らげる。 * 心を大きく動かし、変化させていく。
表情 うなずき 態度	やさしく見守る温かなまなざし、笑顔、励ましや共感的なうなずきなど、教師の気持ちを素直に表し子どもに伝える。 子どもたちの言っていることに耳を傾ける、気持ちに共感する、真剣に対応するといった“聞き上手”になる。	* 教師が心のよりどころとなり、安心して自分を表現できるようになる。
言葉かけ	「あれしてみない?これしてみない?」などの押し付け的な言葉かけにならないようにする。 遊びのきっかけとなるような具体的な言葉をさりげなくかけてみる。 上手下手での評価にならないようにする。	* 子どもたちが主体的にのびのびと表現できるようになる。
場の設定	感じることを、心を動かすことができる場の設定。 子どもの思いとともに、子どもと一緒に作り出し変えていける環境。 興味をもったときにすぐに取り掛かれるような環境の準備。	* 表現したくなる。 * かかりたくなる。 * 子どもたちが自分なりの表現を十分に楽しむことができる。
時間の保障	遊びを続けたい気持ちを受け止められるような時間設定。	* 自らが遊びを考えて作り出すようになる。
遊具・材料	遊具や材料の精選や配置を考える。	* イメージをもって表現したくなる。

4 幼児の実態把握と分析

(1) 実態調査アンケートについて

調査目的

幼児の家庭や園生活における遊びの様子の実態を把握し、本研究の資料として役立てる。

調査対象

ア 嘉数幼稚園いちご組 29名の保護者(回収率：86%)，記名あり

イ 嘉数幼稚園職員 6名(回収率：100%)

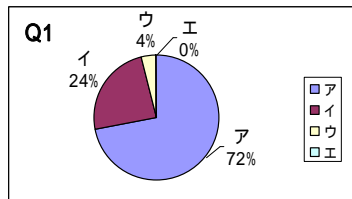
調査日：平成 22 年 11 月 22 日

(2) アンケートの結果と考察

《保護者へのアンケートから》(全項目)

質問1 お父さんやお母さんに幼稚園での出来事を話しますか。

- ア, よく話している
- イ, 時々話している
- ウ, あまり話さない
- エ, 話さない



【考察】

「話さない」が一人もいなかったことから、どの子ども園での出来事を保護者に話したい気持ちをもっていることがうかがえる。子どもたちの伝えたいという気持ちの支えとなっているのは、いつでも聞いてくれるという保護者に対する安心感や信頼感ではないだろうか。

質問2 話の内容はどのようなことが多いですか。(自由記述)

回答の内容	%
友達や教師と一緒に遊んだこと	47
遊んだこと	14
行事のこと, おやつのこと	14
友達のこと (誰が休んでいた, がこんなことをしていたなど)	9
初めて経験したこと, できるようになったこと	9
先生のこと (先生がこんなことをしていた, 話していたなど)	5
友達とトラブルになったこと	2

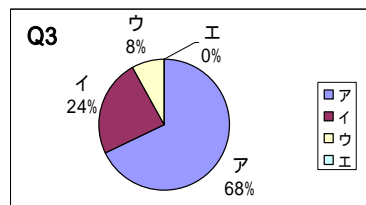
【考察】

幼児は、園生活の中で印象に残った出来事(心が動いた出来事)を話したいと感じていることや、その幼児によって、心に残る体験は異なり、一日の生活の中のあらゆる場面で心を動かしているということがわかった。

教師はこのことをいつでも意識し、日常生活の中の一つ一つの場面を大切にしながら保育していく必要があると考える。

質問3 幼稚園で覚えた歌や手遊び, ダンスなどを歌ったり踊ったりすることがありますか。

- ア, よくある
- イ, 時々ある
- ウ, あまりない
- エ, ない

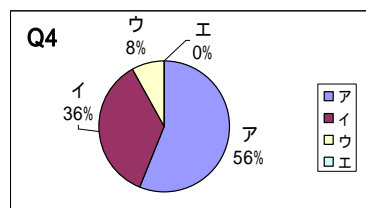


【考察】

「よくある」との回答が7割を占め、園生活を通して経験する内容が子どもたちに与える影響がとても大きいことがわかる。子どもたちに提供する教材を精選していく大切さをあらためて感じた。

質問4 普段の生活の中で, 歌ったり踊ったりして遊んでいることはありますか。

- ア, よくある
- イ, 時々ある
- ウ, あまりない
- エ, ない

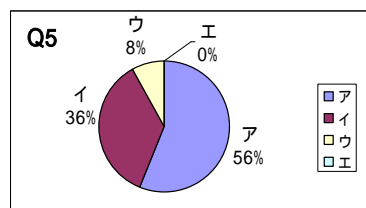


【考察】

「よくある」「時々ある」との回答を合わせると9割以上あることから、自由に歌ったり踊ったりすることは子どもたちにとって身近な表現方法になっていることがわかる。

質問5 お絵かきをして遊んでいることはありますか。

- ア, よくある
- イ, 時々ある
- ウ, あまりない
- エ, ない

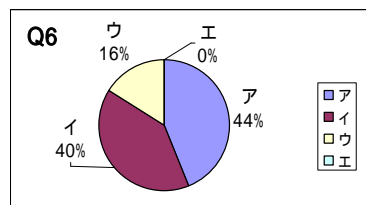


【考察】

「よくある」「時々ある」との回答を合わせると9割以上あることから、自由に絵を描くことは子どもたちにとって楽しいことであり、身近な表現方法になっていることがわかる。

質問6 空き箱や牛乳パック, ちらしなどで作って遊んだり, それを使って遊んだりすることはありますか。

- ア, よくある
- イ, 時々ある
- ウ, あまりない
- エ, ない

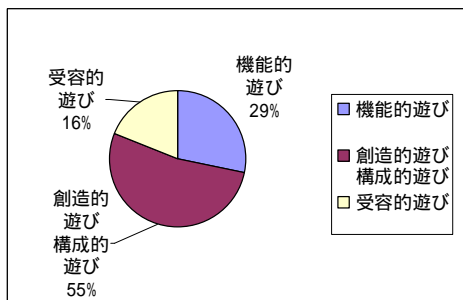


【考察】

「よくある」「時々ある」との回答を合わせると8割以上あることから、自由に作って遊んだりすることは、子どもたちにとって楽しいことであり、身近な表現方法になっていることがわかる。

質問7 お子さんはどんなことをして遊ぶのが好きだと思いますか。(自由記述)
 出てきた回答をビューラーが類型化した遊びの分類を参考に分類してみた。

分類	回答の内容	人数
機能的遊び	外遊び(公園で遊ぶ, ポール遊び, フラフープ, 虫取り, 自転車に乗るなど)・体を動かして遊ぶ・水遊び	15
創造的遊び 構成的遊び	ごっこ遊び(ままごと・たたかいごっこ・スーパーの店員さんごっこ・歌手ごっこ・人形やミニカーなどのおもちゃで遊ぶ・小人探し)	28
	製作遊び・折り紙・ブロック	
	お絵かき	
	手紙を書く	
受容的遊び	パズル・ぬり絵・ドミノ	10
	DVDを見る, ゲーム(ベイブレードゲームなど)	
	絵本を見る	
	勉強	



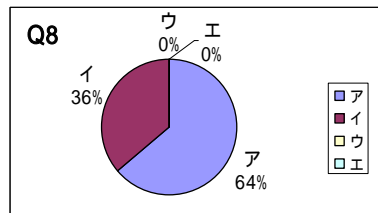
【考察】

家庭における遊びの中でよく見られる姿や様子から, この遊びが好きだろうという保護者の視点での回答となっている。その結果, 機能的遊びが約3割, 創造的遊びや構成的遊びが5割以上を占めていることがわかる。

このことから幼児は, 体全体を動かしたり, イメージを膨らませたりして, 自分なりに感じたことや考えたことを表現することを楽しいと感じていると言えるのではないだろうか。

質問8 降園後や幼稚園がお休みの日などに家族で出かけることがありますか。

- ア, よくある
- イ, 時々ある
- ウ, あまりない
- エ, ない



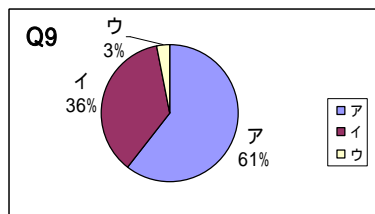
【考察】

「よくある」との回答が約6割以上を占め, 「時々ある」との回答を合わせると100%になった。

このことから, より多くの体験を家族で共有することができていると言える。

質問9 どこに出かけることが多いですか。(複数回答あり)

- ア, スーパーやデパート, ゲームセンターなど
- イ, 公園
- ウ, 動物園や遊園地など



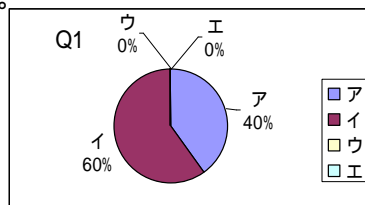
【考察】

出かける場所については, 「スーパーやデパート, ゲームセンターなど」によく出かけるとの回答が最も多いことがわかる。質問7において, 家でスーパーの店員さんごっこをしている子も見られることから, スーパーやデパートなどでの経験が遊びに反映されている様子も見て取れるが, 子どもたちの体験に偏りがあることも否めない。したがって幼稚園では, 子どもたちの家庭での経験も生かしつつ, より充実した園生活が送れるように環境やかかわりを工夫していく必要があると考える。

《職員へのアンケートから》(全6問から抜粋)

質問1 いちご組の子どもたちは先生にあいさつをしたり話しかけたりしますか。

- ア, よくしている
- イ, 時々している
- ウ, あまりしない
- エ, しない



【考察】

「よくしている」「時々している」との回答を合わせて100%であった。このことは, 日常的に全職員で子どもたちにかかわっていることの表れであると考えられる。また職員の話から, かかわる機会が増えたら子どもたちから話しかけてくるが多くなったとの声が聞かれ, 子どもたちの伝えたいという意欲は, 相手との信頼関係や親しみの気持ちと深く関係があることについて改めて考えさせられた。

質問6 幼稚園の子どもたちが遊びを楽しんでいると感じるときはどんなときですか。(自由記述)

【考察】

回答をまとめると、以下の5点に分けることができた。

- 好きな遊びをしているとき
- 友達と一緒に遊んでいるとき
- 友達と一緒に自分の思いを出し合って遊んでいるとき
- できなかったことができるようになったとき
- 教師に遊びの話をしたり、できたことやつくったものを見せに来たりするとき

このことから、幼児が遊びを楽しむためには「自発性」「自由感」「達成感」そして様々な人やものなど「周囲の環境とのかかわり」の4つの視点が重要になってくるものと思われる。

そして、教師が子どもたちの遊びの様子を見て「楽しんでいる」と感じるのは、子どもたちの心の動きが表現されているときではないだろうか。

したがって、上記の4つの視点は、幼児の表現を引き出す上でも重要なポイントであると言える。

(3) アンケート全体を通しての考察

アンケートの中で、家庭での遊びにおいて、歌ったり踊ったり絵を描いたりすることが「あまりない」という回答があった。その背景には、その子自身がその遊びに興味をもっていない場合も考えられるが、家庭においてそのような遊びができるような環境(時間、場所、材料、かかわる人など)が整っていないことも想定される。

また、今回のアンケート結果を受けて、教師がとらえていた園生活における幼児一人一人の実態と照らし合わせてみると、教師が予想していた回答とのずれを感じた。

これらのことから、園生活においては、以下の5点を意識しながら保育していくことが重要であると考えられる。

- ・子どもたちがいつでも自分の思いを様々な方法で表現できるような環境を構成していくこと
- ・子どもたちの興味・関心に応じて、または興味・関心がもてるように、様々な周囲の環境構成を工夫すること
- ・受け止める相手の存在と姿勢が幼児の心に大きな影響を与えることを常に意識すること。
- ・その子にとっての行動の意味を丁寧にとらえていくこと
- ・教師のこれまでのかかわりを振り返り、援助の在り方を見直していくこと

以上のことを意識しながら今後の保育に取り組んでいきたい。

検証保育

1 活動計画

11月の初めに秋の遠足で動物園に出かけた。そこでやぎと岩山を見たときに「がらがらどんだ～！」と言う子が何人かいた。入園当初、教師が『三びきのやぎのがらがらどん』のお話をエプロンシアターで演じて見せたことがある。そのときの感動が残っていて、目の前の「やぎがいる光景」と「がらがらどん」のお話のイメージを結び付けたのではないだろうか。このことから、子どもたちの感動体験が積み重なってイメージを豊かにすることにつながっていると見える。

そこで、遠足での体験も生かし、『三びきのやぎのがらがらどん』の表現遊びを子どもたちの普段の遊びの中に取り入れていくことにした。

月日 【遊びの場】 (活動の時間)	ねらい	活動内容	教師の援助 環境構成
11/17(水) 【保育室】 (お帰りの前に)	子どもが自分なりにイメージを楽しめる	・「三びきのこぶた」の手遊びをする。 ・『三びきのやぎのがらがらどん』の絵本を見る。 ・感じたことや考えたことを言葉や動きなどで自分なりに表現する。	秋の遠足での体験とのつながりから、絵本『三びきのやぎのがらがらどん』の読み聞かせをする。 子どもたちが自分なりにイメージを膨らませて絵本を見ることができるよう、表情を見ながらゆっくりと丁寧に読み進める。 読み終えた後は、子どもたちがそれぞれに感じたことを表現する様子を受け止める。 いつでもその絵本に触れられるように配置しておく。

<p>11/29 (月) 【保育室】 (学級全体での活動)</p>	<p>自分で動きや言葉などで表すことを楽しむ。</p>	<p>・「おちたおちた」のゲーム遊びをする。 ・『三びきのやぎのがらがらどん』のペープサートを見たり参加したりする。 ・セリフを言ったり歌ったり体を動かしたりリズムをとったりして楽しむ。</p>	<p>トロールのイメージをそれぞれが膨らませて楽しめるよう、ペープサートは三びきのやぎだけを作っておく。 子どもたちがトロールになったつもりで『三びきのやぎのがらがらどん』のペープサートを楽しめるように、子どもたちと言葉の掛け合いをしたり歌を歌ったりしながら演じる。 子どもたちが、いつでも自由にペープサートを使って遊べるように、ペープサートや音楽を配置しておく。</p>
<p>11/30 (火) 【保育室】 (好きな遊び)</p>	<p>自分で動きや言葉、絵、造形などで表すことを楽しむ。</p>	<p>・ペープサートを動かして遊ぶ。 ・絵を描いてペープサートにしたり、空き箱や牛乳パック、粘土などでやぎやトロールをつくったりする。 ・友達と一緒に遊びながら、セリフを言ったり歌を歌ったり体を動かしたりする。</p>	<p>子どもたちのやってみようという思いやイメージを引き出せるように、オペレッタの音楽を流す。 子どもたちが自由にかいたりつくったりして表現できるように、牛乳パックや空き箱、紙コップ、ペットボトル、色画用紙などいろいろな材料を準備しておく。 子どもたちが遊ぶ様子を見守り、その子なりの表現を受け止める。 子どもたちが互いにまねをしたり工夫したりしながら様々な表現を楽しめるように、それぞれの表現を他の幼児にも知らせていく。</p>
<p>12/2 (木) 【保育室】 (弁当後)</p>	<p>自分で動きや言葉、絵、造形などで表すことを楽しむ。</p>	<p>・いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 ・セリフを言ったり歌ったり体を動かしたりして楽しむ。 ・がらがらどんになってはしごを渡ったり、黒い布を身にまといトロールになってセリフを言ったりしながら遊ぶ。</p>	<p>子どもたちが自らかかわって遊びたいようになるように、巧技台のはしごや黒い布を用意する。 子どもたちがはしごに興味をもって遊び始めたところで、教師が黒い布で身を隠しトロールになって登場する。 子どもたちのイメージを引き出せるように、教師も一緒に遊び、一人一人の表現を受け止めたり他の幼児の表現にも気付かせるような言葉かけをしたりする。 子どもたちの、自分もトロールになりたいという思いが実現できるように、黒い布を何枚か用意しておく。</p>
<p>12/3 (金) 【保育室】 【戸外】 (好きな遊び)</p>	<p>自分で動きや言葉、絵、造形、音で表すことを楽しむ。</p>	<p>・ペープサートを使って友達と一緒に遊ぶ。 ・感じたこと、考えたことなどを音や動き、言葉などで表現する。 ・友達と一緒に遊びながら、セリフを言ったり歌を歌ったり体を動かしたりする。</p>	<p>子どもたちが自由にかいたりつくったり、音を出して表現したりできるように、牛乳パックや空き箱、紙コップ、ペットボトル、色画用紙などいろいろな材料を準備する。 教師も一緒に遊びながら、身近な材料を使って音を鳴らしてみる。 教師が子どもたちの動きに合わせて一緒に遊び、共に表現し合う中で、共感したり刺激を与えたりする。</p>
<p>12/21 (火) 【保育室】 (お帰りの前に)</p>	<p>自分でイメージを膨らませて楽しむ。</p>	<p>・「3びきのこぶた」の手遊びをする。 ・『おおかみと七ひきの子やぎ』の絵本を見る。 ・感じたことや考えたことを言葉や動きなどで自分なりに表現する。</p>	<p>『三びきのやぎのがらがらどん』とのつながりから『おおかみと七ひきの子やぎ』の絵本を読み聞かせる。 子どもたちが自分なりにイメージを膨らませて絵本を見ることができるよう、表情を見ながら丁寧に読み進める。 読み終えた後は、子どもたちがそれぞれに感じたことを表現の様子を受け止める。 いつでもその絵本に触れられるように配置しておく。</p>
<p>1/6 (木) 【保育室】 (学級全体での活動)</p>	<p>友達や教師と一緒に遊ぶ中で、自分なりに表現することを楽しむ。</p>	<p>・「ころころたまご」の手遊びをする。 ・「ひよこ」の表現遊びをする。 ・友達と一緒に「おおかみさん」の集団遊びをする。 ・セリフを言ったり歌ったり体を動かしたりリズムをとったりして楽しむ。</p>	<p>子どもたちが遊びに使えるようにダンボールや布を準備する。 教師自身も子どもたちと一緒にイメージの世界を楽しむ。 遊びを見ている子には、それがその子なりの表現の過程だと受け止め、心の動きに関心をもってかかわっていく。 教師自身が楽しんでいるという気持ちが子どもたちに伝わるよう、言葉や表情、体の動きなど様々な方法で表していく。</p>
<p>1/7 (金) 公開保育 【保育室】 (おやつ後)</p>	<p>友達や教師と一緒に遊ぶ中で、自分なりに表現することを楽しむ。</p>	<p>・「ひよこ」の表現遊びをする。 ・友達と一緒に「おおかみさん」の集団遊びをする。 ・ダンボールや布などで隠れ場所を作る。 ・セリフを言ったり歌ったり体を動かしたりリズムをとったりして、友達と一緒に楽しむ。 ・つくったり描いたり様々な方法で表現しながら遊ぶ。</p>	<p>「ひよこ」のイメージを共有し、絵や造形などでも表現できるように、様々な大きさや形の色画用紙、空き箱なども準備しておく。 「ひよこ」が卵から生まれる場面をイメージしやすいように絵を表示しておく。 教師が言葉をかけ過ぎずに、一人一人の表現を受け止めて見守り、安心して自分を出せるようにするとともに、自分なりに表現することの楽しさを味わえるようにしていく。 教師も一緒に楽しむ中で、教師自身が楽しんでいるという気持ちが子どもたちに伝わるよう、言葉や表情、体の動きなど様々な方法で表していく。</p>

仮説の検証

研究仮説に基づく保育実践を通して、幼児の表現意欲を高め、幼児一人一人が自分なりの表現を楽しむような援助の工夫ができたかについて、幼児の姿または変容をもとに検証する。

日常の園生活の中で、幼児のありのままの表現を受容し、他の幼児の表現にも触れさせ、教師自身が表現することを楽しむことによって、幼児の表現意欲を高め、幼児は自分なりの表現を楽しむことができるであろう。

1 保育実践の中から幼児の表現をとらえて

第1回目 お帰りの前に【絵本の読み聞かせ】



『三びきのやぎのがらがらどん』
 絵：マーシャ・ブラウン
 訳：瀬田 貞二

環境構成・援助の工夫

- ・遠足での子どもたちの言動から興味・関心をとらえ、発達段階も考慮して絵本を選択。
- ・一つ一つの場面を丁寧に読み進める。
- ・子どもたちのつぶやきを、表情やうなずきで受け止める。
- ・絵本は、子どもたちがいつでも手にとって見ることができる場所に置いておく。



トロルが出てくるよ～！

次は大きいのがららだよ。

トロルこわ～い！

～子どもの姿から～

結果

- ・「こどもの国にいたよ～！」と遠足での体験を思い出していた。
- ・場面によって真剣な表情をしたり、笑顔になったりしながら絵本を見ていた。
- ・「トロルこわい！」「次は大きいやぎだよ～」と言う子がいた。
- ・「トロルの鼻、天狗みたい。」と自分の鼻に握った手を当ててトロルのまねをする子がいた。

考察



- ・遠足で見られた子どもの様子や発達段階に応じて題材を選んだことで、子どもたちがとても興味を示していた。
- ・絵本を見る中でつぶやきや表情から、一人一人が心の中で絵本の世界のイメージを思い描いていることが読み取れる。このことから、子どもたちの思いを受け止めるような教師の援助によって、それぞれの思いやイメージが表現され、共有されたと言える。

第2回目 学級全体での活動【ペープサート】

環境構成・援助の工夫

- ・ペープサートの舞台は、子どもたちが日常的に使っているテーブルを使用し、その上にダンボールを切り開いて作った草を置く。
- ・ペープサートは三びきのやぎだけを作る。
- ・保育室の一角をトロルの住む谷底に見立てる。
- ・子どもたちに「トロルが出てくる時の音ってこんな感じ？」と聞きながら電子ピアノで様々な音を鳴らす。
- ・三びきのやぎがそれぞれ登場する場面では、音楽を流しながら歌う。
- ・教師自身が楽しんで表現しながら演じる。
- ・まとめの場面で、やぎのペープサートを使って子どもたちと会話をする。

～子どもの姿から～

結果

- ・教師がペープサートを準備し始めると、近づいたり触ったりする子が多かった。
- ・教師がピアノで表した音を聴いて、低い音が出たときに「この音！この音！」と反応していた。
- ・音楽に合わせて手を叩いたり体を動かしたりしてリズムをとったり、一緒に歌ったりしていた。
- ・トロルになって「だれだ～！」「ウオ～！」「とっとと行ってしまえ～！」などと叫んだり、表情や言葉、体の動きなどで表現する姿が見られた。
- ・「トロルは岩だよ。」と言う子がいた。
- ・「トロルは天狗みたいな鼻だよ。」と握った両手を鼻に当てて体で表現する子が何人かいた。
- ・教師や友達の表現を笑顔で見ている子がいた。

そうそう！
それぞれ！



この音！
この音！



《まとめの場面より》 教師が小さいやぎ、中くらいのやぎ、大きいやぎになって話す。

T : 「あのね、小さいやぎが何かみんなに聞きたいことがあるって言うてるんだけど・・・。」

子どもたち：「いいよ～。何？何？」・・・興味をもった様子で身を乗り出している。

T(小やぎ)：「あのね、さっき橋をカタコトツカトコトツテ渡ったときにね、とっ～でも怖いトロールがいたんだ。ほら、あの子。ちょっと前に出てきて。」

Y児 : みんなの前に少し照れながら出てくる。

T(小やぎ)：「あなたのトロールがとっ～でも怖かったんだよね。もう一度トロールになって見せてくれる？」

Y児 : 「いいですよ。」と言ってトロールになったつもりで「ウォ～！」と表現する。

他の幼児 : それぞれが、Y児のまねをして表現したり、「自分の方が怖いトロールだぞ～」と言わんばかりの表現をする。

T(中やぎ)：「うわぁ～！やっぱりこわかった～。ありがとう。」

Y児 : 「はい。」と言って、誇らしげに元の場所に戻り座る。

T : 「次は中くらいのやぎからもみんなに聞きたいことがあるんだって。」

T(中やぎ)：「ぼくさ～、トロールに会ったの初めてなんだ。それでさ～、トロールってどんなものなのかよくわからないんだよね。だから誰か、トロールってどんなやつなのか教えてくれない？」

G児 : 「岩。岩。」

他の幼児 : 「うん。岩。」

T(中やぎ)：「誰かみんなにも教えてくれる人いるかな？」

子どもたち：「はい！」「はい！」

T(中やぎ)：「じゃあ、あなた！お願いします。」

M児 : 「天狗。」

T(中やぎ)：「天狗ってどんなの？」

M児 : 握った両手を鼻に当てて表現する。

子どもたち：「赤いの。」「鼻がピョ～ンって長いの。」と身振り手振りも加えて表現する子、「ウォ～！」と言いながら再びトロールになる子など様々な表現が見られる。

T(中やぎ)：「へえ～そうなんだ。さっきはトロールが怖すぎてよく見えなかったんだよ。ありがとう、教えてくれて。」

T(大やぎ)：「おれにも教えてくれ。さっき橋を渡ろうとしたらたっくさんのトロールが出てきたんだよ。それでさ、さすがのおれさまも怖くて走って逃げちゃったよ。それでトロールの声がよく聞こえなかったから誰か聞かせてくれないか？」

子どもたち：「ウォ～！」「ワー！」などと声を出し、それぞれにトロールになって表現する。

ウォ～！

だれだ～！
おれの橋をカタコト
させるのは～！

考察



・絵本の世界に入り込めた様子が、子どもたちの表情や言葉に表れていた。保育室の一角をトロールの住む谷底と見立て絵本の世界へ導入したことが子どもたちの心を動かし、それぞれの表現につながったのではないだろうか。
・がらがらどんのペープサートを使った物語の展開を通して、子どもたちがペープサートに向かって話しかけたり表現したりするなど遊びが広がった。

第3回目 好きな遊び

環境構成・援助の工夫

- ・ペープサート作りに必要な材料の準備。
- ・ペープサートやCDデッキを目に付く場所に配置。
- ・幼児一人一人の遊びの様子を笑顔で見守り、「わ～！それいいね～」などと表情や声の調子、仕草などで受け止めたり、幼児の表現をまねたり刺激になるような動きや言葉かけを工夫するなどして教師自身が楽しみながら、雰囲気を作る。

ぼ～くは小さい
がらがらどん



結果

～子どもの姿から～

- ・自分たちで舞台を準備し、音楽を流しながらペープサートを動かして遊んでいた。
- ・トロールやがらがらどんの絵を描いてペープサートを作っている子がいた。
- ・「トロールは怖いから赤にした～。」と言って作ったペープサートを見せにくる子がいた。
- ・粘土や製作遊びなどをしながら、がらがらどんの歌を口ずさんだり、体を動かしたりする子がいた。
- ・友達の表現を見て、「こんながいいんじゃない？」と自分の考えた動きを見せ合っていた。
- ・大型積み木を橋に見立てて、「メェ～」と言いながら渡る子がいた。

次は中くらい
やぎだよ。

ペープサートを
作っている様子



考察



・ペープサートをつくって動かしながら友達とやり取りを楽しんだり、音楽に合わせて歌を口ずさんだり、リズムをとったり、体で表したりするなど、遊びの中で様々な表現が見られた。このことから、子どもたちの心が動かされる環境であったと言える。
 また、友達の表現を見てまねをしたり自分なりに工夫したりする幼児の姿も見られたことから、教師の意図的な環境構成や他児とのイメージの共有、教師の共感的なかわりによって、教えられた表現ではなく自分なりの表現を楽しむ姿が見られ、さらにイメージが広がって表現意欲が高まったと考える。

第4回目 弁当後のひととき【保育室内での好きな遊び】

環境構成・援助の工夫

- ・巧技台のはしごと黒い布を準備する。
- ・子どもたちがはしごに興味をもち始めたところで、教師が黒い布を頭にかぶって登場する。
- ・トロルになつたりがらがらどんになつたりしながら、ごっこ遊びを共に楽しみ、互いに表現し合うことで幼児一人一人の表現を受け止めていく。
- ・教師自身が表現を楽しんでいる様子を言葉や表情などで伝える。

～子どもの姿から～

- ・はしごを見て「トロルの橋だあ！」と言う子がいた。
- ・「食べないで～」「ぼくはおいしくないよ。」と言ってはしごを渡る子がいた。
- ・「エイ！ヤー！」と言いながらトロルと戦う子がいた。
- ・黒い布を身にまとしてトロルになり、「それならとつと行ってしまえ～！」と言葉や動きで表現する子がいた。
- ・ペープサートで使っていた草をはしごの横に置く子がいた。
- ・「トロルが出てくるのは橋のところがいい。」と言ってはしごのそばにトロルになって隠れる姿が見られた。
- ・粘土やお絵かきなど他の遊びをしながら、教師や友達との遊ぶ様子を笑顔で見ている子がいた。
- ・がらがらどんの遊びに参加する子が次第に増えた。

結果

トロル
こわいよ～。



考察



・初め、はしごの上をただ渡るだけだった子どもたちが、教師が黒い布をかぶり「だ～れ～だ～！」と言いながら登場すると、それぞれが小さいやぎ、中くらいのやぎ、大きいやぎになって橋を渡り始めた。このことから、教師が意図的に環境を構成し自ら楽しんで表現することによって、子どもたちの中にあるイメージや表現意欲が引き出されたと言える。さらに、みんなで楽しんでいる雰囲気共有できたことで、子どもたちの心が動かされ、遊びに参加する子がどんどん増えていったと考える。

第5回目 好きな遊び

環境構成・援助の工夫

- ・牛乳パックや新聞紙、チラシ、ペットボトルなど身近な素材を準備しておく。
- ・子どもたち一人一人の思いや考えを肯定的に受け止め、教師が感じたことも言葉や表情などで伝える。
- ・紙コップを使って音を鳴らしてみる。
- ・教師が子どもたちの動きに合わせて一緒に遊び、共に表現し合う中で、共感したり刺激を与えたりする。

～子どもの姿から～

- ・チラシをくるくる巻いて作ったものを鼻に当て「トロルだぞ～！」と表現する姿が見られた。
- ・はしごとペープサートの舞台をつなげて配置し、トロルやがらがらどんになつたり、ペープサートを動かしながら橋を渡る姿が見られた。
- ・逆さまにした紙コップをテーブルの上で交互に動かして音を出し、「小さいやぎが歩いてみたい。」と表現する子がいた。
- ・友達や教師と一緒に、戸外で忍者の修行ごっこをする姿が見られた。
- ・他の幼児や教師のまねをしたり自分なりに工夫して表現する姿が見られた。

結果

トロルだぞ～！



木登りの修行中
で～す！



小さいやぎが
歩いてみたい！

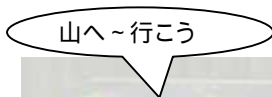
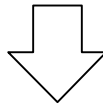
ほうきの術～！



考察

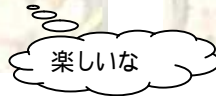
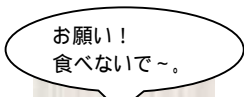


・それぞれにイメージをもって表現し、友達と共有しながら遊ぶ姿が見られた。子どもたちの内面にたくさんのイメージや体験が蓄積され、様々な表現となって表れたと考える。また、教師の援助の工夫によって子どもたちの表現方法が広がり、一人一人が、教えられた表現ではなく、感情が込められた自分なりの表現を楽しむことができているように思う。



生活の中で表現の楽しさが高まって…

わくわく発表会 12月19日(日)



考察



・普段、集団の中で表現するのに消極的だったり泣いてばかりいた子が、のびのびと笑顔で表現する姿が見られた。その様子から、みんなで表現する楽しさを味わっているように感じた。子どもたちの心を動かしたのは、その場でもし出される雰囲気と、応援し見守ってくれる保護者の温かなまなざし、共に作り上げてきた友達や教師の存在だったのではないだろうか。

第6回目 お帰りの前に【絵本の読み聞かせ】



『おおかみと七ひきのこやぎ』
絵：フェリクス・ホフマン
訳：瀬田 貞二

環境構成・援助の工夫

- ・『三びきのやぎのがらがらどん』とのつながりから『おおかみと七ひきのこやぎ』の絵本を選択。
- ・子どもの思いを表情やうなずきで受け止める。
- ・絵本は、子どもたちがいつでも触れられる場所に置いておく。

結果

～子どもの姿から～

- ・絵本の表紙を見て、多くの子が「がらがらどんと似てる！」と言っていた。
- ・場面によって真剣な表情や笑顔が見られた。
- ・おおかみが死んだ場面で「やった～！」と表現する子、「おおかみかわいそう。」とつぶやく子がいた。
- ・読み終えた後、「三びきのこぶたのお話と似てる。」「赤ずきんちゃんみたい。」などと話す子がいた。

考察



・絵本を見ているときの表情やつぶやきから、子どもたち一人一人の思いを読み取ることができた。これまでの遊びの様子や発達段階を考慮して題材を選んだことや、子どもたちの思いを受け止めるような教師の援助によって、それぞれの思いやイメージが引き出されたと考える。

第7回目 学級全体での活動【集団遊び『ひよこ』『おおかみさん』】

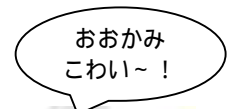
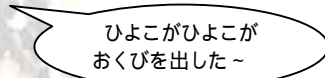
環境構成・援助の工夫

- ・ダンボールや布を準備しておく。
- ・教師自身もイメージの世界を楽しみながら話を進めたり表現したりする。

結果

～子どもの姿から～

- ・『ひよこ』では、体を丸めて卵になる姿や、ひよこになって手をくちばしにして歩く子、両手を羽根にして跳び跳ねる子などの姿が見られた。
- ・『おおかみさん』では、ダンボールに隠れたり黒い布をかぶっておおかみが来るのを不安そうに様子をうかがっている姿が見られた。怖がって泣き出す子もいた。



考察



・イメージを膨らませて導入することで子どもたちの心の動きが表現となって表れていたが、『おおかみさん』ではおおかみが来るのを怖がって泣き出す子がいた。このことから、援助や環境構成によって子どもたちのイメージを膨らませることはできたが、子どもたちの想像力を刺激し過ぎたのかもしれないと感じた。

公開検証保育指導案

平成 23 年 1 月 7 日（金）
嘉数幼稚園 4 歳児いちご組
男児 16 名 女児 13 名 計 29 名
教諭 琴宮城 亜希子
指導教諭 大湾 由美子

- 1 主な活動名 「ひよこ」「おおかみさん」の集団遊びをしよう。
- 2 ねらい それぞれのイメージを表現し合い、友達の良さに気付く。
- 3 内容 友達の表現を見て、まねをしたり工夫したりして遊ぶ。

4 活動設定の理由

幼稚園教育要領の領域「表現」では、「幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」とあり、そのためにはその子なりの表現を受容し、表現しようとする意欲を受け止め、結果ではなく表現する過程を大切にしていける保育が求められている。

4 歳児は、教師との信頼関係を基盤に自分の思いを表出することから、身近な生活経験をごっこ遊びに取り入れて楽しむなど想像的な活動が豊かになり、友達とのつながりを楽しむ様子も見られる時期である。

そこで、初めから特定の表現活動のみに取り組みさせるのではなく、友達とかかわって遊ぶ中に様々な表現活動を取り入れていくことによって、教えられた表現ではなく、感情が込められた自分なりの表現を楽しめるようになるのではないだろうかと考え、本活動を設定した。

学級(幼児)の実態

集団生活の経験がない幼児がクラスの約 6 割を占める。入園当初は、保護者から離れることに不安を感じて泣いたり、初めての環境や活動に戸惑う様子も見られたが、次第に好きな遊びを見つけて遊んだり、教師や他の幼児に積極的に話しかけたり、いろいろな活動に意欲的な様子も見られるようになった。

学級においては、絵本を見ることや手遊び、歌を歌うことが好きで、遊びの中で友達同士絵本を広げながらおしゃべりを楽しんだり、生活のいろいろな場面で友達と一緒に手遊びをしたり、歌を口ずさみながら遊ぶ姿なども見られた。その他、戦いごっこやままごと遊びを楽しんだり、衣装を身にまとい何かになったつもりになって遊んだり、イメージしたものを絵に描いたり、つくったり、絵本の世界からイメージを膨らませ遊びの中に取り入れて遊ぶなど、様々な表現活動も見られる。

しかしながら中には、集団の中で自分の思いや考えを表すことに消極的な幼児もいる。

教材観


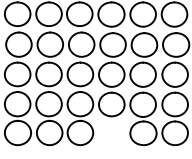
発表会で演じた『三びきのやぎのがらがらどん』とのつながりから、『おおかみと七ひきの子やぎ』の絵本の読み聞かせを行った。そこで、その中に出てくるおおかみとの掛け合いを題材にした集団遊び「おおかみさん」を取り上げることにした。鬼ごっこ的な遊びをしながらも、絵本の内容と関連させてイメージを膨らませることにより、その子なりの様々な表現が見られるのではないだろうか。

この活動を通して、他の幼児の表現にも触れることができ、まねをしたり自分なりに工夫したりすることで、さらなる表現意欲や豊かな表現にもつながると考える。

指導観

日常の遊びの中から、子どもたちの興味・関心のあるものをとらえて表現題材として取り上げ、子どもたちがのびのびと自分なりの表現を楽しめるような保育展開と楽しい雰囲気づくりを心掛ける。

その中で、子どもたち一人一人の心の動きをとらえ、それぞれのよさを認めながら、どの子どもも安心して自分の思いを表すことができるように援助していきたい。さらに、その子なりの表現を受け止め、友達の良さにも気付けるようにしていきたい。

指導案 平成 23 年 1 月 7 日(金)		年中いちご組 男児 16 名 女児 13 名 計 29 名 保育者：翠宮城亜希子			
<主な活動名> 「ひよこ」「おおかみさん」の集団遊びをしよう。					
研究 仮説	・日常の園生活の中で、幼児のありのままの表現を受容し、他の幼児の表現にも触れさせ、教師自身が表現することを楽しむことによって、幼児の表現意欲を高め、幼児は自分なりの表現を楽しむことができるであろう。				
ねらい	それぞれのイメージを表現し合い、友達の良さに気付く。	内容	* 友達の表現を見て、まねをしたり工夫したりして遊ぶ。		
時間	予想される幼児の活動	教師の援助と環境構成		* 評価項目 (幼児の姿)	備考
10 : 30	<p><おやつ後の室内遊び> 粘土遊び 製作遊び 絵本を見る。 ブロック遊び 折り紙 ごっこ遊び ハガキ作り カルタ ペープサート なりきり遊び 「ひよこ」の表現遊びをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【「ひよこ」の表現遊び】 教師と「もういいかい?」「もういいよ。」の掛け合いをしながら音楽に合わせて、ひよこになって表現する。</p> </div> <p>「おおかみさん」の集団遊びをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【「おおかみさん」のルール】 保育室の中だけで隠れる。 みんなが楽しい気持ちで遊べるように考える。</p> </div>	<p>それぞれに好きな遊びが楽しめるよう見守る。 「ひよこ」が卵から生まれる場面をイメージしやすいように絵を表示しておく。 自然に集まって遊べるように「ひよこ」の音楽を流す。 教師がまねをしたり紹介したりしながら、それぞれの表現を認め、他の幼児の表現にも気付かせる。 子どもたちと一緒に隠れる場所を準備するなどして遊びの場の環境を整える。 子どもたちが絵本の世界のイメージが膨らむように、教師がお母さんやぎやおおかみになって、一人一人の表情を見ながら集団遊びを進める。 遊びながら集団遊びのルールに気付けるようにする。 言葉かけやうなずき、表情などでそれぞれの思いを受け止めていく。 それぞれの遊びの中で見られる表現をとらえ、必要に応じて援助する。</p>		<p>* 自分なりの表現を楽しんでいるか。 * イメージの世界を楽しんでいるか。 * 能動的に遊んでいるか。 * 友達の表現を見てまねをしたり工夫したりしているか。</p>	<p>【準備するもの】 ・いろいろな色や形の画用紙 ・「2つに割れた卵」と「ひよこ」の絵 ・牛乳パック ・空き箱 ・紙皿・紙コップ ・ストロー ・割り箸 ・ペープサート ・衣装(カラービニールで作ったスカート、ビニール風呂敷、カチューシャなど) ・ダンボール・布 ・「ひよこ」「おおかみさん」の CD ・おおかみの帽子</p> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">  <p>教師</p> </div> <div style="text-align: center;">  </div>
11 : 05	<p>片付けをする。 集まる。 教師の話静静地に聞く。 翌日の遊びに期待をもつ。</p>	<p>遊びのイメージをみんなで共有できるようにし、翌日の遊びにつなげていく。</p>		<p>* 翌日の遊びに期待をもっているか。</p>	
11 : 15	<p>担任に引き継ぐ。</p>				
評価	<p>* 子どもたちが興味をもてるような環境の構成をしていたか。 * その子なりの表現意欲を引き出せるような援助をしていたか。 * 教師自身が楽しんで取り組んでいたか。</p>				

前日までの幼児の姿		予想される幼児の姿		教師の援助と環境構成	
<p>・それぞれに気の合う友達とかかわって、自分の思いや考えを表情や動き、言葉、絵画、製作など様々に表現しながら好きな遊びを楽しんでいた。</p> <p>・「ひよこ」や「おおかみさん」の集団遊びを、好きな遊びや学級活動の中で気の合う友達と一緒に楽しんでいた。中でも、ひよこが生まれる場面やおおかみとの掛け合いの場面、友達と一緒に隠れる場面で表情や動き、言葉など様々な表現が見られた。</p>		<p>粘土にかかわって 友達と互いに見せ合いながら、それぞれ自分の作りたいものを作っている。 言葉かけやうなずき、表情などでそれぞれの思いを受け止めていく。</p>		<p>玩具にかかわって 友達と一緒に絵本を見たり、折り紙をしたり、ブロックや積み木で好きなものを作ったりして遊んでいる。 イメージが広がりやすいような素材を準備する。 いろいろな素材を身にまとい、イメージを膨らませながら何かになったつもりになって遊ぶ。 友達とやり取りをしながら遊べるようにペープサートを置いておく。</p>	
ねらい *内容		トイレ		ベランダ	
それぞれのイメージを表現し合い、友達の良さに気付く。 *友達の表現を見て、まねをしたり工夫したりして遊ぶ。		ロッカー		手洗い場	
時間	幼児の活動の流れ	ダンボール		製作遊び	
10:30	<おやつ後の室内遊び> ・粘土遊び ・製作遊び ・絵本を見る。 ・ブロック遊び ・折り紙 ・ごっこ遊び ・ハガキ作り ・「ひよこ」、「おおかみさん」の集団遊びをする。	宝物を展示する 自分が作ったものや見つけたものなどを飾る。 誰がどのような思いで作ったのか、または展示したのかわかるように表示する。		「ひよこ」「おおかみさん」の集団遊び それぞれが自分なりにひよこの表現をする。 ダンボールや布などを使って隠れ場所を作る。 おおかみが食べにくる場面までのドキドキワクワクした気持ちを、それぞれに表情や動き、言葉などで表現する。 子やぎになったつもりでダンボールの後ろやロッカーの陰、テーブルの下などに隠れたり、おおかみから逃げたりする。	
11:05	・片付けをする。 ・集まる。	宝物展示		テーブル置き場	
11:15	~担任に引き継ぐ~	出席ノート		ピアノ	
		ごぎ		いろいろな材料を使ってハガキに絵や文字を書いて友達や教師に配って遊ぶ。 ひよこを作る。 様々な大きさや形(丸、三角、四角など)の色画用紙を準備しておく。	
				「ひよこ」「おおかみさん」の集団遊び 子どもたちと一緒に隠れる場所を準備するなどして遊びの場の環境を整える。 子どもたちが絵本の世界のイメージと絡み合わせて楽しめるように、まずは教師がお母さんやぎになって一人一人の表情を見ながらゲーム遊びの話をし、ルールの確認をする。 子どもたちが自分たちで遊びを進められるように、必要に応じて援助する。	

環境構成・援助の工夫

- ・それぞれが好きな遊びをじっくり楽しめるような場の設定。
- ・言葉をかけ過ぎず、教師が実際にやって見せる。
- ・卵が2つに割れて「ひよこ」が生まれる様子を絵で表示しておく。
- ・様々な大きさや形の色画用紙、空き箱などの準備。
- ・『ひよこ』の曲を電子ピアノで弾く。
- ・一人一人の心の動きをとらえ、他の遊びをしながらも、みんなでイメージを共有して楽しめるような雰囲気作りをする。
- ・教師自身が楽しんでいるという気持ちが子どもたちに伝わるよう、言葉や表情、体の動きなど様々な方法で表していく。
- ・まとめの場面で子どもたちの遊びの様子やつぶやきを振り返って取り上げ、次への期待につながるような話の進め方をする。

～子どもの姿から～

- ・教師が卵とひよこの絵を描いていると、「何作ってるの?」「やりたい。」と言って、描き始める子がいた。
- ・教師がピアノで『ひよこ』の曲を弾き始めると周りに集まって歌う子がいた。また、他の遊びをしながらリズムをとったり口ずさんでいる子もいた。
- ・教師がドアを叩く仕草をしながら「トントントン」と言うと、それぞれ好きな遊びをしていた子どもたちが手を止めて教師の方に向き、「何の音?」と返し集まってきた。
- ・「おおかみさん」に、体全体で参加している子、他の遊びをしながらも歌を歌ったりリズムをとったりしている子などがいた。
- ・登園時からずっと泣いていた子が笑顔で遊びに参加していた。
- ・「おおかみやりたい!」と言う子がいた。
- ・お腹がいっぱいになって倒れているおおかみの周りに集まり、「今のうちにお腹を切って助けよう。」「石を入れよう。」などと言いながらチョコチョコと切るまねをしたり、石を詰める動きをしたりする子がいた。

結果

た～まごがわれた～



粘土遊びをしながら…



森の～こみち
散歩に行こう



おおかみ
さ～ん!

がらがらどんの
ペープサート

考察



- ・教師自身が楽しんでいる様子を全身で伝えることで、みんなで遊びを共有している雰囲気を作ることができ、その中でそれぞれが自分なりに楽しんで表現している様子が見られた。
- ・子どもたちが『おおかみさん』の集団遊びを『おおかみと七ひきのこやぎ』の絵本のイメージと結び付けて表現している場面が見られた。このことから表現においては、教師の援助や環境構成だけでなく、体験の多様性と関連性が大切であることを感じた。

2 公開検証保育反省会

(1) 保育者の反省

- ・子どもたちがそれぞれの好きな遊びの中で自分なりに表現している姿が見られてよかった。
- ・昨日「おおかみさん」をやったときに泣いていた子が、今日は楽しんでいたのでよかった。
- ・朝からずっと泣いていた子が、「おおかみさん」が始まると自然に笑顔になって参加していた。遊びの中で「楽しい」「ドキドキ」「わくわく」した気持ちが生まれ、「さみしい」「悲しい」気持ちを打ち消したのではないだろうか。
- ・友達によさに気付けるようなまとめがうまくできなかった。

(2) 意見及び感想

- ・「習得したことを次にどう生かすか、どう伝えるか」が小学校では重要であり、自分の思いや考えを表現する力が必要とされる時代である。今回の保育は「伝える」ことに結びつくものだった。
- ・集中のさせ方、認め方、一人一人を見る目などがとても参考になった。
- ・「ストーリー性があり流れていく保育」「注意しないで気付かせる保育」「語りかける、つぶやきを大切にしたい保育」だった。

(3) 指導助言(沖縄キリスト教短期大学非常勤講師 大湾由美子先生)

- ・教師自身がなりきって楽しむことが大切である。見ていてイメージが湧き、教師の思いが伝わってきた。それが一人の幼児の「次、おおかみやりた～い。」につながった。
- ・泣いている子が輪に入ることができたのは『集団の力』。そして教師の寄り添う視線が気持ちを安定させたのであろう。「かもし出す雰囲気」に一人一人が満足し浸っていた。教師が楽しみ、幼児も楽しんで、互いに響き合い、つながり合っていた。
- ・子どもたちがおおかみ役の教師を叩いたり蹴ったりしたとき、「だめ!」と叱るのではなく、「先生、叩かれて楽しくない。」と言ったことで、2回目には子どもたちの行動が変わっていた。「おおかみさん」の遊びの中で「人の嫌がることをしない」と気付かせる。けじめを教えていた。

- ・『幼小連携』というところ、小学校教育に合わせていこうとする傾向があり、「態度」に焦点を当てがちだが、幼稚園では「気持ち」「心」を育てることが本来の姿である。
- ・4歳児でも「表現力を引き出す」指導は必要だが、それを必ずしも全体の場で伝えなくてよい。遊びの中で一人一人の表現をとらえ、教師が言葉かけをしたり一緒に遊んだりしながら、それを見て友達のよさに気付くようにしていくことが大切である。場面場面で適切な教師の援助があれば、もっと表現を引き出せるだろう。
- ・これまでの体験が蓄積されて、それが表現となって表れている。「それぞれが楽しむ」「イメージを共有し合う」「共有の中で楽しむ」につながる。
- ・最後に集めた場面では、教師が子どもの言葉を拾って次への雰囲気を作っていた。「感想を言わせて終わり」ではなく、次へつなげるために集めていたのがよかった。

3 仮説の検証まとめ

日常の園生活の中で、ありのままの幼児の表現をとらえることにより、一人一人の幼児や学級の実態に応じた環境の構成や教師のかかわり方を工夫することができた。また、幼児が体験の中で何に興味や関心をもっているかを読み取って環境を工夫し、他の幼児の表現にも触れさせたり、教師自身が表現することを楽しむことによって、幼児が様々な表現を楽しんでいる様子が見られた。

以上のことから、日常の園生活の中で、ありのままの幼児の表現をとらえて環境の構成や教師のかかわり方を工夫することによって、幼児の表現意欲を高め、自分なりの表現を楽しむことができたと言える。

研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 集団の中で自分の思いや考えを積極的に表現することの少なかった幼児が、みんなと一緒に活動する場面で楽しい気持ちを表現している様子が多く見られるようになった。
- (2) 子どもたちと体験を共にしていくと、一人一人の素朴な表現の中に子どもの心を読み取ることが多く、子どもの表現をとらえることは幼児理解につながるということに気付くことができた。
- (3) 表現意欲を引き出す上で重要なのは、かかわって遊びたくなるような環境の構成や、仲間との信頼関係、感動する心の育成、体験の多様性と関連性を重視した保育であることがわかった。

2 今後の課題

- (1) 子どもたちのより豊かな表現力を育むため、粘土遊び、ペープサート、音遊びなど様々な表現方法についての教材研究を深める。
- (2) 幼児理解を深め、表現に関する4歳児保育の教育課程や指導計画を立てる。

3 おわりに

今回、保育についてじっくり見つめ直す時間がもてたことで、理論、実践の両面から「幼児が表現する楽しさを味わうための援助の在り方について」深く考えることができました。

このような研究の機会を与えてくださいました宜野湾市教育委員会の諸先生方、宮城邦子宜野湾市教育研究所所長、多和田稔嘉数幼稚園園長に心より感謝申し上げます。また、研究を進める中でいつも温かく見守り励ましてくださいました山城園子副園長、検証保育にあたりご理解、ご協力をいただきました嘉数幼稚園職員の皆様、そしていちご組の高江洲準先生と子どもたちに深く感謝申し上げます。

沖縄キリスト教短期大学非常勤講師の大湾由美子先生においては、本研究を進めるにあたって、「幼稚園教育のあり方」や「子どもの表現についてのとらえ」、「集団生活の入口としての4歳児保育のあり方」、さらには「教師としての姿勢」など、多くのご指導・ご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

最後に、研究の進め方や論文の書き方など、丁寧にご指導くださいました研修係長の西康勝先生、共に励まし合い、笑い合いながら過ごしてきた同期研究教員の先生方、はごろも学習センター職員の皆様、大変ありがとうございました。

主な参考文献

- 河邊貴子・赤石元子監修 2009 『今日から明日へつながる保育』 萌文書林
 文部科学省 平成20年 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
 野波健彦・板良敷敏編著 2009 『新保育シリーズ 保育内容 表現』 光生館